

小林秀雄著『本居宣長』:二十六章主題《『やまと魂』(F)に對する、眞淵・宣長の洞察[F:『文辭の麗しさ』・姿(調)・沈默『皇大御國』]と、篤胤(標語化)との懸隔:その「關係論」的纏め》

①文事(物:場 C') ⇒ からの關係: ③も④も、①の限りを盡くした(D1の至大化)人で【とは、古今集・冠辭(物:場 C') ⇒ 轉義[『低き所(物:場 C')を固める』(古書の註釋・古言の語釋:D1の至大化)] ⇒ 合體[即ち『ますらをぶり』『俗言(さとびごと)』を指す。参照:P239]】⇒ 「②:『やまと魂(姿:F)』」⇒ E:「其處(低き所:轉義)で②といふ言葉は捕へられた[即ち合體、『俗言(さとびごと)』『ますらをぶり』同様、『己が腹の中』に合體の意味合(姿・調:F)で捕へられたといふ事]。この共通な經驗(①の經驗、即ち『低き所を固める:轉義』)のうちで、④のいふ『調:F』と③の言ふ『姿:F』とが、恐らく重なり合ひ映じあつた。②(F)といふ言葉(姿F:合體)が根を下してゐたのも、この①の經驗の深部[轉義:即ち、古今集・冠辭⇒轉義⇒低き所⇒合體(『やまと魂(F姿)』&『ますらをぶり』『俗言(さとびごと)』)]なのであつた」(②への距離獲得:Eの至大化) ⇒ ③宣長④眞淵(△枠):①への適應正常。

①文事の經驗(『低き所を固める』。物:場 C') ②『萬葉』(物:場 C') ⇒ からの關係(承前)ところが、⑤の仕事では、「③:この①[古言(言靈:古今集・冠辭) ⇒ 低き所(轉義) ⇒ 合體(姿・調:F)]といふものが、全く缺落(D1の至小化)してゐる」⇒ 「④:『やまと魂』(③的對立概念F) ⇒ E:④の古意(物:場 C')が『雄武(ますらたけ?)を旨とする心』とわかれれば[とは、『意は似せ易い』即ち『古の大義(『ますらをぶり』物:場 C')を口真似(語釋:D1の至小化)』を手掛りとすれば]、⑥の心のうちに下してゐる②といふその根(言靈:古言・冠辭)はどうでもよいものであつた。まして『源氏』(物:場 C')の如き、中古文弱(D1の至小化)の書を、『古學(物:場 C')の要用(D1の至大化)なる書』のやうに言ふのは、宣長の『玉の小櫛』(物:場 C')を誤解(D1の至小化)するものとした」(④への距離不獲得:Eの至小化) ⇒ ⑥眞淵(△枠)/⑤篤胤(△枠)の①への適應異常。

(物:場 C')…

①文事(物:場 C')

~~~~~

①文事の經驗(『低き所を固める』。物:場 C') ②『萬葉』(物:場 C')

からの關係(D1の至大化)

\*「③も④も、①の限りを盡くした(D1の至大化)人で【とは、古今集・冠辭(物:場 C') ⇒ 轉義[『低き所(物:場 C')を固める』(古書の註釋・古言の語釋:D1の至大化)] ⇒ 合體[即ち『ますらをぶり』『俗言(さとびごと)』を指す。参照:P239]】」。

\*「(承前)ところが、⑤の仕事では、「③:この①[古言(言靈:古今集・冠辭) ⇒ 低き所(轉義) ⇒ 合體(姿・調:F)]といふものが、全く缺落(D1の至小化)してゐる」(D1の至小化)」。

F(言葉・概念)…

「②:『やまと魂(F)』」

~~~~~

「④:『やまと魂』(③的對立概念F)

E: [F(言葉・概念)との附き合ひ方・用法]…「So called」「Fと(△枠)との距離獲得」(Eの至大化)。

*「其處(低き所:轉義)で②といふ言葉は捕へられた[即ち合體、『俗言(さとびごと)』『ますらをぶり』同様、『己が腹の中』に合體の意味合(姿・調:F)で捕へられたといふ事]。この共通な經驗(①の經驗、即ち『低き所を固める:轉義』)のうちで、④のいふ『調:F』と③の言ふ『姿:F』とが、恐らく重なり合ひ映じあつた。②(F)といふ言葉(姿F:合體)が根を下してゐたのも、この①の經驗の深部[轉義:即ち、古今集・冠辭 ⇒ 轉義 ⇒ 低き所 ⇒ 合體(『やまと魂(F姿)』&『ますらをぶり』『俗言(さとびごと)』)]なのであつた」(②への距離獲得:Eの至大化)。

~~~~~

\*「④の古意(物:場 C')が『雄武(ますらたけ?)を旨とする心』とわかれれば[とは、『意は似せ易い』即ち『古の大義(『ますらをぶり』物:場 C')を口真似(語釋:D1の至小化)』を手掛りとすれば]、⑥の心のうちに下してゐる②といふその根(言靈:古言・冠辭)はどうでもよいものであつた。まして『源氏』(物:場 C')の如き、中古文弱(D1の至小化)の書を、『古學(物:場 C')の要用(D1の至大化)なる書』のやうに言ふのは、宣長の『玉の小櫛』(物:場 C')を誤解(D1の至小化)するものとした」(④への距離不獲得:Eの至小化)。

(△枠)③宣長④眞淵(△枠)

/⑥眞淵⑤篤胤(△枠)